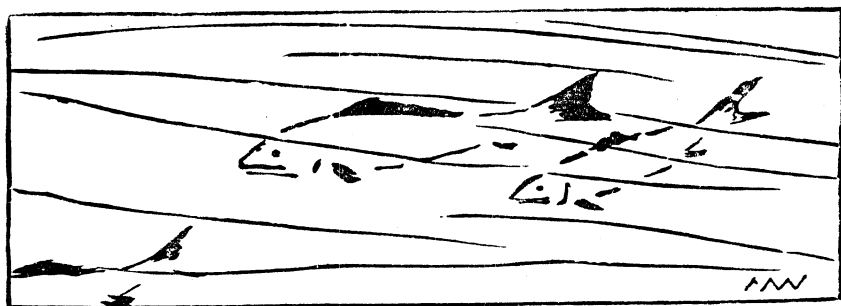




美女の死骸

上 司 小 劍

—

今日から『入梅』と曆に書いてある日、私は暫く二階の欄干に凭れて、薄墨色の迅い雲足を眺めてゐた。雨はまだ一滴も落ちぬけれど、空気には夥しく水分を含んで、夕陽が丘と名つくる細長い丘一帯の若葉は、青い繪の具を使ひ過ぎたと言つた風に、重苦しく見えてゐる。

丘の麓の廣い野原には、新建ちの家が四五軒、塗り立ての澁の色を薄赤く見せてゐるが、それも濕氣にベト／＼としてゐるらしく、手に觸れる指が赤く染まりさうである。

午前十時の太陽は、腫物の癒つた痕でも見るやうに、薄墨色の黒の中に、ぼんやりと圓い一點を印して、よく／＼考へなければそこに太陽のあるといふことを知り難い。

昨夜は、郊外の住居に附き物の犬がよく吠えたので、屢々夢を破られて、朝から

頭の重いところへ、鳥も快くは啼かぬこの大氣で、腦を取り外して、冷たい清水を波々と湛へたのに二三滴のリゾールでもたらしたので、心ゆくまで洗濯をした上、薄絹で拭ひかけて、元の腦骨の下へ納めたいやうな氣がする。

何を感じ違へしたのか、一羽の白い蝶が、晴れた春の日でもあるかのやうに、ひら／＼と舞つて來て、二階の屋根の廂から、廊下へ入り、小さな窓のガラス障子に鼻づらをこすり付けて、外へ出やう／＼と焦慮つてゐる。

こんな厭やな日には、庭の葎の茂みにでも潜んでゐればよいのに、其の葎の宿を出て、弱い羽根で重い大氣の中へ泳ぎ出たさへあるに、わざ／＼狭苦しい人間の家の二階の廊下なんぞへ入つて來て、出口が分らずに藻掻いてゐるのは笑止千萬である。ガラスといふものゝあることを知らない憐はれな蝶は、先きが見え透いてゐて、一寸も一分も進むことが出來ずに、堅く行く手を遮ぎられてゐるのに、奇妙を感じずには居られないであらう。

見よ、憐はれな小ひさきものは、美人の薄化粧に使ふやうな白い粉を少しづつ散らして、羽根をばたばたさせながら、ガラス戸を上下左右に悶え歩いてゐるではないか。小ひさき彼れは、たと前面の廣い世界に出やうとして、いら／＼してゐるのである。先きが見えてゐて少しも前へ行かれないのは、何んたる妙ちさりんのことであらう。――

斯くして彼の憐はれな小ひさきものは、藻掻きに藻掻き、悶へに悶へて不思議な透明な魔の隔てに身を擦り付けて死なうとしてゐる。全知全能――とまでは行かずとも、毛蟲から進んだ蝶よりは少しばかり

り惻好な、——ガラスといふものを造り給ひし人間の眼から見れば、よく分つてゐることを、彼の憐はれな小ひさきものには少しも分らずに藻掻き悶へてゐるのである。

私はこんなことを考へながら、ツト進んで、ガラスに鼻づらを擦り付けつゝ騒いでゐる憐はれな小ひさきものを捕へて、廣い世界へ放してやらうと思つて、ばた／＼させてゐる羽根を押へやうとすると、憐はれに小ひさき彼れは、大きな毒手が來たと思つてか、如何にもして、眼に見えぬ奇妙不可思議の障壁を突破しやうと、ます／＼羽根をばたつかして、物狂はしいまでに騒ぎ廻はつたが、世の中に眼に見えぬ不可思議のあらうとは思つてゐないらしい、憐はれに小ひさき彼れは、必ず前へ進み得るものとの確信から、一尺四方ほどのガラスを、あっちへ滑り、こっちへ滑りして、只管に前へとのみ焦慮り、後へといふ考へが少しも浮ばぬやうであつたから、捕へにくいには捕へにくかつたが、後へ戻ること知らぬ悲しさは、折角人間にはない二つの結構な羽根を有ちながら、到頭人間の二本の指に押へられて了つた。

乃で私は直ぐに其のガラス窓を開いて、憐はれな小ひさきものを、彼れの望んでゐた廣い世界へ放してやると、哀はれや、押へる時指頭に力が入り過ぎたものと見えて、眞ッ直ぐに飛ぶ力はなく、少しばかりクル／＼と舞つてから、ばたりと屋根瓦の上に落ちた。

憐はれに小ひさきものは、滑々と光る瓦の上で、バタバタと二度だけ力なく羽根を動かしたが、それ切り動かなくなつて、蒼光りのする瓦の上を永久の眠りの床としたらしい。私は何うにかして其の美しい、憐はれな、白い死骸を取り上げてやらうと思つたけれど、手を伸ばしても届さうになく、窓

から這ひ出すには危なッかしく、下から登るには梯子がなかつた。それでデッと其の小ひさな白い死骸を見詰めて、彼女の（私はこの時からこの蝶を女性ときめて置きたかつた）魂魄が何處を彷徨ふてゐるであらうかなどと考へてゐた。

夢が胡蝶か、胡蝶が夢か。と口吟みながら、私は何時までも、小ひさな白い死骸に見入つてゐた。美女の墓から蝶がひら／＼と舞ひ出た。美女の魂魄が蝶に化したのであらう。などといふ物語はよくあるが、美女が死んで蝶になつて、蝶が死んで何になるであらう。美しく愛らしい蝶の前身が、醜く厭やな毛蟲であるなどといふシアンスは、姑く考へたくもない。

私はまたこんなことをも考へながら、窓のガラス戸を締め、美女の死骸を家根瓦の上に見棄て、階上の書齋に入つた。

床の間には、西京に今を盛りの閨秀作家が手に成つた燕子花の絹本の一軸が懸つてゐる。其の前にはロダン先生の髯武者の半身像が、額縁に箆めて立てかけてある。鼻眼鏡が光つて、鼻が小氣味よくツンと尖つてゐる。鼻の孔の大きいのが目立つ。耳も福耳で大きい。頭髮は短くて、格別に手入れをしてもないやうだ。ロダン像の横に、相馬焼の俗な花瓶があつて、黄色い夏菊が萎れ切つたまゝに挿されてゐる。其の脇の書架の上には、幾冊の本を亂雑に並べた上へ、バリ出来の粗末な手遊品の人形が三つ放り投げたやうにして置いてある。一つは幽霊、他の一つは兵隊、今一つは競馬の騎手である。いづれも手ツ取り早く造つたものらしく、眼鼻なども黒と赤とで簡單に彩つてあるのだが、一つ／＼に表情があつて、物に立てかけて置けば立てかけたなりに、轉がして置けば轉がしたなりに、必ず其處に個性が現は

れてゐるやうで、しかも上と下とに距てやうと、前と後とに分けやうと、三つの人形には、それ／＼の連絡があり、天體の星座の如く、一つ／＼別々で、また自然の聯鎖がある。パリを出て八重の汐路を遙々と渡つて來た三つのものが、異郷に在つて元の土に歸へらうとも、必ず一つに結ばれやうとする執着があるのであらうか。この三つの人形に隣りして、日本の作家の手に捏ねられた裸體女の石膏が立つてゐるけれど、パリの手遊品人形に比らべて、全く死んでゐる。

私は毎日見慣れて、何の珍らしさもない、自分の机の周圍をば、今日は何んだか特別の趣きをもつて見入つた。さながら初めて入つた^{はひ}室のやうな工合にして。……

鬱陶しいこの天氣に、まぐれ出た白い胡蝶が私の指に摘み殺されて、其の小ひさな魂魄がこの書齋に入つて來て、私にこんな思ひをさせるのではあるまいか。胡蝶の靈が私の頭の中に潜り込んで、腦の中樞を搔き亂すのではあるまいか。

私は何んだか氣味が惡くなつて、總身の毛穴がよだつやうであつた。空は雲がいよ／＼厚くなつたと見えて、室の内は燈火の欲しいほどの薄暗さである。私はツト立つて廊下から階下へありやうとした。其の序に小ひさな窓から家根瓦の上を覗くと、白い蝶の死骸は、標本のやうに、愛らしく羽根を擴げたまゝである。

正午にはまだ間があるけれど、私は外で午飯^{ひるめし}をやらうと思つてゐたので、そろ／＼外出の支度に、先づ新しい足袋を穿いてゐると、魚屋が來て好物の鯛^{しらす}の白子を置いて行つた。乃でまた方針を變へて、宅の午飯を待つことにした。

二三丁先きに競馬の厩があるので、蠅の發生が夥しく、宅へも多く飛んで來て、家人は毎日蠅を殺すのに二三時間づゝを費してゐる。

『同じ蟲でも蝶々などは可愛らしくて殺す氣になれませんが、蠅は憎らしいから幾らでも殺せます。ね。……蠅を殺しても化けて來るなんていふ心は起りませんね。』

棕櫚の葉の蠅叩きを斜に構へて、家人はこんなことを言ひながら、臺所から茶の間へ來た。

『蝶々を殺すと、化けて出るかね。』

私は二階で彼の憐はれな小ひさいものを摘み殺したことが、家人の心にも感應して問ひもせぬに蝶々などと言ひ出したのではないかとまで思つて、不安な口調で斯う言つた。

『蝶々だつて、よく見ると厭やな蟲ですが、衣裳が良くて派手だから、蠅みたいにジミな小うるさいのを殺したのとは違つて、人間の胸にこたへるんでせうね。……乞食女が坂道で、たれ死にをしたつて、碌に新聞にも出やしません、女優が舞臺で卒倒したら大變な騒ぎでせう。若し女優が殺されでもして御覽なさい「女優殺し」なんて、毎日／＼新聞には其のことばかり書いてあるでせう。』

家人は斯う言つて、手近かの餉臺ちゆうぶたいの上に手をすり足をすりしてゐた丸々と肥えてゐる一匹の蠅を棕櫚の葉で叩き殺した。

蠅の死骸を見ても蝶の死骸を見たやうな憐はれさの起らぬばかりでなく、小氣味のよい感じがする。其の黒く醜い死骸を庭先きに投げ棄て、暫く見入つてゐると、醜い死骸が少しづゝ動き出した。偕は蘇りでもすることか、今一撃を加へねばならぬと、私は家人の手から棕櫚の枝を奪ひ取つて、ジツと蠅

を見詰めると、勤勉で力の強い蟻が蠅の死骸に喰い付いて、已れの身體からだよりも幾倍あるものを食料に貯へやうとして巢の方へ引き行かうとするのである。それが面白いので、私はまた餉臺の上で一匹の蠅を獲つて其の死骸を庭先きに投げた。スルと直ぐ蟻が来て、それを引き行かうとする、家人の殺した蠅の死骸とは見ると、もう加勢の蟻が三つ四つも集つて来て、樂々と一尺も先きへ引いて行つてゐる。後の蠅の死骸にも早や一つの加勢が出合つて、二つで引ッ張つてゐる。

蟻は其の社會組織に於いて、人間よりも遙かに進んでゐると學者は言つてゐる。この大きな世界が蟻の自由にならぬのは、人間の自由にならぬのと同じことであるけれど、蟻は其の能力の及ぶ限り社會狀態を齊整して来て、人間よりもズツと進歩した生活をなし得るやうになつたから、人間社會に見るやうな苦痛も醜態もない。人間の社會が蟻の社會に比敵するまでに進歩するには、前途に對して盛んにストラッグルしなければならぬさうである。――

私はまたこんなことを考へつゝ、取つても取つても取り盡くせぬまでに近所の厩から襲來する蠅を叩き殺しては、庭先きを忙し氣に往來する蟻の仲間と與へた。蟻の嗅覺は稀に見る鋭さだといふことであるが、直ぐ傍に大きな蠅の死骸の轉がつてゐるも知らずに、チョコカ／＼と行き過ぎて了しまふのが多い。偶然この香餌にブツかつたのが、『こいつはうまいぞ』と言つた風にして、蠅の死骸に嚙り付く。さうして後から來た二三匹と力を合はせて、自分の身體の四五倍もあるものを引いて行く。見たところ總べてが偶然のやうで、規律も節制も何も無さうで、それがちやんと大きな有機體の生活團を作つてゐるのだもの。天體の星座を見るやうに、各個性が完全に發達して絶對自由を得てゐながら、自然に他のものと

照應連絡して、束縛も抑壓も無しに、各個は各個として、一つの細胞として、また更に團體として、滞りなく活力を進めて行く。成程これが生活の齊整から得た進歩の絶頂かも知れぬ。

生殺しにした蠅の片翼を取つて、蟻の群れに投げてやるのが一番面白い。嗅ぎ付けて喰いかゝつた蟻は、蠅の羽搏きに跳ね飛ばされるが、懲りずに幾度でも喰い付く、其の中に一匹二匹と蟻の助勢が来て、前後左右から蠅に取り付く、蠅は全身の勇氣を鼓して、三四匹の蟻を身につけたまゝ引き摺つて歩く、轉がつてはまた喰い付き、駈け違つては助勢を呼ぶ蟻の大奮闘もさることながら、片翼を剥がれて、最早現世に望みの渺い蠅が如何にもして、刹那の難義から脱しやうとする躍動が面白い。人間は團扇片手に甘い乾葡萄などを摘みながら、笑つて——或は笑ふにも値ひせぬ些事として——傍觀——といふほどにはならぬ態度で——見てゐるけれど、蟻も蠅もシンケンである。嚴肅である。眞面目である。積極的と消極的との相違はあるけれど、彼等の全生活力は此處に極度まで展かれてゐるのである。

其の中にも私は、厩の方から飛んで來た蠅を殺しては、蟻の領地(或は遠征地)に投げてやる。蠅も厩の中で臭い藁の上にも晝寢してゐれば、棕櫚の葉で叩き殺されて、蟻の兵糧にされる危険はないのであるが、彼れもまた生物である、生きてゐる中は躍動せずにはゐられぬのである。

生と死との境界標から、遙かに生の方に近い程度に棕櫚の葉の一撃を與へて、片翼を剥いだ上、其の蠅を蟻の群れに投ずると、蟻は香餌來れりと、直ぐ噛み付くが、蠅はスウツと電車のやうに駈けて逃げる。蟻の足では追つかかけやうもない。蟻は流石に思想が自由で、團隊生活が進歩してゐるらしく、總てが同意の下に行はれて、強制の規律といふものに壓伏されてゐるのではあるまいから、其の遠征軍の並

び方も人間のする觀兵式の行列のやうなものでなく、自然の中に個性の尊重の上から發動した團隊の約束といふ如きものがあつて、各個の細胞を一つの有機體に繋いでゐるやうであるが、この片翼の蠅が蟻の群れを狂ひ廻はる時には、人間が散兵教練をやつてゐる上へ、飛行機が墜落しかゝつたくらゐの狼狽はする。

其の時、私が妻楊枝の尖端で、狂ひ廻はる蠅の頭を一寸突くと、蠅はグタリと倒れて、足だけをピク／＼動かしてゐる。蟻は得たりとばかりに喰ひ付いて、まだ息の通つてゐる蠅を引いて行かうとした。蟻どもはこの不意の偉大な加勢を何と觀じてゐるのであらうか。天の與へと思つてゐるのであらうか、神の加護と信じてゐるのであらうか。偶然の出來事として看過してゐるであらうか。彼等の社會には迷信があるであらうか。彼等は人間のすることをば全知全能として尊び恐れてゐるであらうか。――

蟻の領地の上の方には、廂から松の枝へかけて、丸々と肥えた蜘蛛が其のアンデイヴィデユアリズムの醜い身體をさらしつゝ、網を張つてゐるが、この網には一つも獲物がかゝつて居らぬ。私もこゝへは蠅の死骸を投げてやりたくない。

蟻の社會では、人間の社會よりも分業法が細くなつてゐて、勞働に服するものと、生殖に従ふものとに、職業もハッキリ分れてゐるといふことである。

『人間の社會でも、さういふ風に分業が行はれるやうになると、僕は眞ッ先きに生殖業を志願して、鑑札を受けるね。』と、私の知つてゐる或る肥満した洋行歸りの紳士は、いやらしい眼付きをして言つたことのあるのを覚えてゐる。

「愉快な生殖といふ仕事を見棄て、情けない労働を志願するものがあるだらうか。」

其の肥満した紳士はまたこんなことを言つて、卑しい笑ひ方をした。

「蟻の社會のやうに進歩したところでは、仕事は皆んな愉快ときまつてゐるのでせう。情けないなどは、下劣な人間社會からの想像に過ぎないんでせう。」

私は斯う言つてみた。肥満紳士は何を馬鹿なといふ顔付きをした。其の言ふに言はれぬ厭やなく、女郎蜘蛛のやうな顔付は、今もなほ眼の前に見えるやうである。

鯛の白子を蒸して、トマトソースをかけたのと、鯛の頭のスープとで午飯を喰べた。大きな蛇が來たので、早速棕櫚の葉で叩き殺して、蟻の領地に投げた。家人は飯の給仕をしながら、五六匹の蠅を叩き殺して、盡く蟻の領地に投げた。

苺にクリームをかけたのを食後に喰べながら、蟻の領地を見やると、運ぶべき食料の豊富なのに、だん／＼同勢が増して來て、今投げた蛇の死骸などには、もう蟻が眞ッ黒にたかつてゐる。

傍の青磁の瓶かけには、達磨堂の小形の鐵瓶に湯がたぎつてゐる。私は苺の七を置くと、其の鐵瓶を取り上げて、煮立つた湯を蛇にたかつてゐる蟻の群れを中心にして、蟻の領地へ出來るだけ廣く浴せかけた。ジウ／＼と音して、煮え湯は土に浸み込んだが、蟻の小ひさな肉體は、高度の熱に爛れて、伏屍狼籍と言つた風に、ゴロ／＼と斃れてゐる。旺盛であつた今の今までの活力は全く失はれて、せつと喰ひ付いてゐた蛇の死骸とともに、魂魄のない『物』になつてゐる。

其の上の網の眞ん中には、蜘蛛が冷かな眼でこの慘狀を白眼に睨んでゐるらしいので、私は棕櫚の枝

を逆手にして、ビシリと一撃を與へると、蜘蛛は忽ち肝腦地に塗れて醜いが上に醜い死態しにたまを見せた。其處には纔に九死の危険境を通れた蟻が、キョト／＼として走つてゐたが、彼れにはもうこの蜘蛛の死骸といふ新たな好食料を顧みる餘裕はなかつた。

私は先刻の蝶の死骸が何うなつたかと、二階へ上つて見ると、彼女は清らかな瓦の上に、永い眠を眠つたまゝである。厭やになるほど勤勉な蟻の勞働も、此處までは力が及ばないであらう。私は憐れな小ひさく美しさものを、下根にして働くばかりが能の蟻風情に無残むざく々と喰へさせたくはないと思つた。このまゝに、風に煽られて、雲の上までも舞ひあがれかし。美しき姿して。……

私は、斯う獨言して、またデツと美女の死骸に見入つた。

美しい蝶も死んだ。勤勉にして能く勞働し、能く生殖する蟻も死んだ。個人主義の蜘蛛も死んだ。傑れたる暴力の前には、如何なるものも無力である。

暴力の勝利！

私はヨソイキに着更へて、フイと家を出た。

二

空は朝の通り曇つたまゝである。電車の通じてゐる坂上の街道へ、踵に砂埃を立てつゝ急ぐと、程遠からぬ葎園へ、新鮮な葎を喰たべに行くらしい三四組の男女に會つた。西洋人も二三人見えた。島國の人でも大陸の人も居たやうである。ストローベリーといふ言葉や、フレイズといふ言葉が、ちよい／＼耳に入はつた。

電車では、一二臺やり過して、都合好く一番先きの端に腰をかけた。動き出すと眞向から風を受けて、帽子が吹き飛ばされさうである。風とともに小砂をも顔に吹き付けて来るのは厭やだけれど、肌の蒸し暑さは、風に巻り取られて行くやうで、心知が清々とする。この邊で第一の長い烟突を有つた錢湯の『女』と扇形の額に書いたのを掲げてある方の入口が内部から開いて、大功記の十段目で息子の竹槍に刺されるやうな白髪頭の老婆が腰を屈めて出ると、其の後から身長のスラリとした、眼の覺めるやうな湯あがり姿の若く美しい女が出た。

『先刻の蝶がこんなになつて現はれたのではないだらうか……』

私は途方もないことを考へながら、電車から其の女を見てゐたが、電車の疾風の如くに走り行く出會頭によく見ると、其の女は界限に評判の疑問の女であつた。

『若く見えたり、老けて見えたり、小柄に見えたり、大柄に見えたりするので、近所でも彼處の家には姉妹二人娘が居ると思つてたんですつて、妙な女ぢやありませんかね。綺麗だから若く見えませうけど、彼女もうそんなに若くはありませんよ。』と、家人も噂をしたことのある其の女であつた。

冬の夜を銀座のカフェに更かして有樂町の家根の上から、郊外へ通ふ高架鐵道によつて歸へらうすると、早や車掌が笛を吹きかけてゐる終電車へ、チビた日和下駄の音を立て、駆け込んで来る若い女があつた。時ならぬ頃に、湯上りと見えるほてつた赤い顔をしてゐるのが不思議だと思はれたが、其の當座終電車に乗ると屹とこの女が来る。あらい模様を置いた對の銘仙の羽織と着物とが毎も同じである。チビた日和下駄が草履に變つてゐることもない。湯上りの赤い顔までが、判で捺したやうにきまつてゐる。

る。紫縮緬の肩掛のやうなもので、昔風のちこそ頭巾風に頭をつゝんでゐるのも、きまつた形であつた。或る夜それが其の紫縮緬を撤つて手に持つてゐたが、頭髮はと見ると、鬘下地にしてあつた。ハ、ア解つた、と私は思ふとゝもに、今までそれと氣が付かなかつた自分の迂濶を笑ひたくなつた。彼女はこの高いステーションから後家根の見える劇場で養成しかゝつてゐる女優であつたのだ。

私の下りるステーションで、矢張り彼女も下りた。さうして兩手で袂の端を握つて、小走りに石段を駆け登つて行く状は、やだ舞臺の上の修練の足らぬらしい身のこなし方であつた。

『彼女あれは淫賣ですつてね。』と、或る日家人はさもさげしむ風の口調で言つた。

『淫賣たつて職業だらう。』

私は、家人がそんなことは口にするだに穢けがらしいと言つたやうな顔付きと、さもさも自身はそんなものよりも一段上に位する人間だ、わたしは淫賣ぢやないといふ風の態度とが氣に入らぬので、態と斯う言つてやつた。

『××座の女優になつたんださうですが、——さう言へば、××座の新女優として大勢の寫眞が新聞に出た時、あの女の顔もありましたよ。——一昨年あたり淺草の六區へ出てたことが知れて、仲間から排斥されたりしたので、到頭除名されたんですつて。……』

現在の世の中に於ける婦人の位地とか職業とかいふことに就いては一切盲目な家人に、私の『淫賣たつて職業だらう』と言つた言葉の奥に潜んだ意味が解らう筈はないので、こんなことを言つて彼女の身體にケチを付けやうとした。

『○○○○郎といふ壯士役者の妾めかけをしてゐたこともあるんですつてね。』

淫賣とか妾とか、婦人に取つて最も恥辱であるらしい文字を並べて、家人は彼女を貶し去らうとした。

『お前だつて、生活の爲めに俺の女房になつたんだらう。……職業として俺の家へ片付いて來たんだらう。』

斯う言つて、私はヂツと家人の顔を見詰めてゐたが、家人には、私のこの言葉が家人自身に先刻さつきから言つた彼女を貶した言葉とどれだけ密接な關係があるかといふことを全く知らなかつた。

『兎に角綺麗だからいゝぢやないか。女は綺麗でなければ生きてゐる甲斐がない。醜い女なんか生れて來なくてもいゝんだ。』と、私は棄鉢のやうに言つて、くるりと横を向きながら、家人に、ぼんの窪を見せた。

『綺麗と言つても一寸の間ですよ。子でも生んでごらんさい、直ぐ汚くなりますからね。』

當てこすりを言はれたと思つたらしく、家人はツンとして斯う言つた。

『子を生むから女はえらいんぢやないか。今ではもう女が何事も皆男に負けて了しまつて、女のすることゝ男に出來ないのは子を生むといふことだけだ。男が幾ら威張つても、これだけは何どうにも仕様しやうがない。』
何かなしに、家人と反對のことを言つてみたいといふのが、私の其の折りの心持ちであつた。

『なアに子さへ生れなけれや、女は男に負けてやしませんよ。子を生むといふことが一番女の弱味よはみですからね。』

『そらさうかも知れない。……總べてのものは、長所が即ち短所、強點が即ち弱點になるんだからね。』

國でも社會でも個人でも皆さうだよ。』

私の話は何うかするとギョチない書生論に入つて行かうとする。――

こんな時には、ゆつくり走つて呉れ、ばい、と思ふ電車は、意地わるく速力を増して、乗つてゐる私は歩いてゐる彼女の顔をチラと見たゞけで、直ぐもう首を廻らして、白髪頭の老婆と並んで歩いて行く其の後姿を見送らなければならなかつた。

チラと見た其の瞬間にも、彼女は持前の嬌羞を作つて、濡ひの豊かな眼で電車の方を見て行つた。腰の曲つた老婆よりは二尺からも身長が高く、肥えてゐなければ痩せてゐない撫で肩の形が傑れて好かつた。老婆の黒い帯に對して、淺黄の狭い帯を貝の口に結んだのが可愛らしくて、今日は殊に若く、十六七より上には見えなかつた。

『成るほど、若く見えたり老けて見えたり、小柄に見えたり大柄に見えたりする女だ。女優に倣つてゐるのかも知れない。』

こんなことを口の中で獨りごとに言つてから、私は暫く彼女に就いて家人と語り合つたことをいろいろと思ひ出してゐた。

『あんな女を女優にして置けばいいのに、除名するなんて、××座も馬鹿だ。女優の品行を彼れ是れいふなんて、花に戯れる蝶を追つ拂ふよりもまだ野暮だ。』

私はまた電車の中でこんなことを考へてゐた。

『全で教育がないんで、書き拔きが満足に讀めないんですつて、そんなことで朋輩に馬鹿にされて、自分にも辛くなつたんでせう。』と、家人の言つたことを、また少しづつ思ひ出した。

『教育が何んだ。俺は教育といふ化物を呪ひたい。』

こんなことを思つてゐると、電車は早や芝園橋の乗換場に着いた。

三

『ウ、』と唸るやうな聲が左の耳に入つたので、私は横をむいて見た。

『お出かけ。……』と太い聲が、矢張り唸るやうに聞えて、薄鼠色の洋服を着た六尺豊かの大きな人が、弛んだ顔の筋肉に寂しい微笑を湛へて立つてゐた。私は丁度來た目的の電車を一つ遣り過すことにして、『何處へ行くんですか。』と、必要もないことを訊いてみた。

『△△銀行へ給仕の口を頼んどいたから、これから試験を受けに行つて見やうと思つて。……』と、大きな人の聲には、物の憐れが含まれてゐた。給仕の口といふのがこの大きな人には不思議なので、私は一寸呑込めなかつた。この大きな人は一昨年〇〇會社を罷められてから無職業に苦んでゐるので、近頃この人を見ると直ぐに聞くのは、『何處かいゝ口が』といふ言葉であつたけれど。

『うまく及第して呉れるといゝがなア。』と大きな人は心配さうな顔をした。私はこの人の大きな、弛んだ顔から、寂しい、憐れな、心配さうな、いろ／＼の厭やな表情を見るに堪へないで、傍に眼を外らすと、其處に顔の色の蒼い、血の巡りのわるさうな少年が、紺飛白に小倉の袴を穿いて立つてゐた。さうして私の視線と其の少年のドンヨリと曇つたこの日の天候のやうな鈍い眼の光と行き逢ふと、少年は

白い布片の被せてある學生帽を脱いで丁寧に禮をした。

『雄二郎の奴、先刻から幾度も辭儀してるんだい。』と大きな人は苦々し氣に言つた。大きな人が二男の雄二郎を連れて△△銀行へ給仕の試験を受けさせに行くのだなといふことゝ、雄二郎が先刻から私に幾度も禮をしたけれど、私が氣付かずに居たのだといふことが、同時に解つたので、私は帽子をとつて丁寧に、子供への答禮には過分な頭の下げ方をした。

『試験は三時からだが、まだ大分早いね。』と、大きな人は稍満足氣な顔をした。

『給仕なんぞさしたつて詰まらないでせう。』と私は言つて、續いて來た電車の方向標に見入つた。

『なアに此奴は學校が嫌ひでね。』と、大きな人の顔にはまた苦しうな色が浮んだ。雄二郎は去年中學校の入學試験を三ヶ所まで落第して、到頭無試験入學の安中學校へ入つたけれど、今年の進級試験に落第して、

『雄二郎は一學年を二年づゝかゝつて行くんだから十年經たなけれや中學が卒業出來ない。』と、今年三學年の兄宇一郎は言つてゐた。

『まだ時間があるんなら、公園の中をブラ／＼歩かうぢやありませんか。』と、私は目的の方向標を掲げた電車がなか／＼來ないので、斯う言つて橋の方へ歩き出した。公園をブラ／＼するなんて、そんな呑氣な場合ぢやない。とでも言ひた氣な顔をしながら、大きな人は、それでも黙つて、雄二郎と二人で私の後から隨いて來た。

『一生懸命に汗水流して働いても、長屋の家賃が拂ひ切れないで、店立てを食ふ奴があるのに、高がノ

ラクラ坊主の寢所に大きな家を建てるんだね。」

暫く無言で歩いてから、大きな人は例にない齒切れのよい調子でこんなことを言つた。右手の方に竹矢來を組んで、『大殿工作所』と筆太に黒々と達者な字を書いた木標を建て、假屋の中で大工たちが手斧の音を立てつゝ太い木材を扱つてゐるのを、ジロ／＼と見やりながら。

『堂塔伽藍は幾度も建つべし。また幾度も焼くべし。……昔は言つたものださうです。火事ほどよく利く廣告は今だつてありませんものね。大本山の大きな堂が焼けると、ソラ大變だと、早鐘の響きと、天を焦がすやうな焰とは、誰れの耳にも目にも入る。……大本山の名と其の宗旨とは一層強く大勢の人の頭に印象される。こんな立派な廣告はない。おまけに今なら整くる日の新聞が大袈裟な書き振りで盛んに無料廣告をやつて呉れる。……イヤ假本堂の建築だの、方丈の引き越し先さだのと、其の當座は廣告の種が盡きない。それからいよく再建の勸化といふことで、傳道的機會を作る。……普請にかゝる、棟上げだ、開眼供養だと、一尾の鯛をさしみにしたり、鹽燒きにしたり、うしほにしたり、煮付けにしたりするやうに、寺が焼けて建つまでには随分いろ／＼のことに利用が出来る。……だから昔は坊主が態々火を放けて寺を焼いたものださうですよ。』と、私が唾液を呑み込み／＼言ふと、

『このまアせちがらい世の中に、坊主の寢所の贅澤な普請に金を出す奴があるもんですな。』と、大きな人は感慨の深さうな顔をした。

『そこは矢ッ張り慾得づくですからね。死んでから極樂へ行かうと思つて。……』

『フ、ン。……』と。大きな人は鼻先さで笑つたが、それからまた暫くは何事かを獨りで考へる風をし

『雄ちゃん、お父さんがあんなことを言つてゐるよ。』と、私は仕方なしに雄二郎の方を見たが、雄二郎は艶のない顔をケロリとさして、菓子で喰いたさうに、ぼんやり突ッ立つてゐた。

『君、こいつ馬鹿ぢやないだらうかね。』と、大きな人は、親類中で評判の話の種を、今頃漸く氣にかゝつて耐らんといふ風をして言ひ出した。

『さうぢやないでせう。……大石内藏之助も子供の時は晝行燈と言はれたさうですからね。却つてこんなノツツリした、山が崩れても驚かん、と言つた風なのが先きになつてえらくなるんかも知れませんか。』と、私は大きな人の好きな浪花節の智識で解釋の出来る比喩を引いて言つた。

『それもさうだがね。』

稍會心の笑みを漏らしつゝ、大きな人は更に言葉を次いで、

『奥州の棚倉か北海道の空知邊へでも行つてこっそり死ねば、東京の新聞へは死んだ人なんて小ひさい字で名も出されずに濟むと思ふから、いッそやつ付けやうかと、幾度決心しかゝつたか知れないが、親甲斐もないやういふ親でも、子供の眼からは大船のやうにたよりにしてゐるだらうと思ふと、それこそ可哀さうだし、また子供の大きくなつた後に、君の親爺は行方不明だなんて友達に言はれるだらうと思ふと、死ぬにも死ねないし、……こんな苦しいことはないよ。』と、突つ立つてゐる雄二郎の方を見い／＼言つた。雄二郎は父の言葉も一向耳に入らぬらしく、矢張ケロリとして、大きな口で欠伸を二つ三つ續けてした。

『詰ならないことを考へたツて仕様がな。……死ぬ、死ぬいふものに死んだためしなしといふことも

あるから、そんな下らんことは言はないで、まア早くいゝ勤め口でも見付けるですね。」
私は言ふこともないので、こんなきまり文句を並べて、汗の小粒の染み出してゐる大きな人の黒く廣い額を見た。白髪は少いが頭のテツペンのごっそりと禿げかゝつてゐるのが、折柄脱いだ古い8形のバナマ帽の下から見えた。

『其の口がなか／＼ないんでね。……詰まらないことでも何か腕に覺えがあると、また仕事も見付かるんだが、普通の読み書きと算盤ぢやア、何處でも人が餘りかへつてゐるんでア。……僕くらゐの年輩になると、役人なら敕任か少くとも奏任なら三等になつてゐるか、銀行會社なら重役だものね。腰辨なら學校を卒業した若手がゴロ／＼してゐて、安くて來るんだもの。……よッほどいゝ引きでもなけりや、何も好きこのんで金のかゝつてない年寄りの體をかうことはないんだ。……』

眼の縁に露の玉が宿つてゐはせぬかと思はれるほどに、沈み切つた顔をして、物哀れな聲を出すのが、身體の大きいだけ、一際目立つて慘ましかつた。

『だん／＼セチ辛くはなつて行くんですが、今は殊に工合のわるい時でね。……これが貧民と富豪——勞働者と資本家——といふ風にキチンと分れて了へば、ほんとに始末がいんですがね。中途半端の妙なものがあつてね、中等社會だの何んだのと言つてゐるから、そいつが一番困るんですよ。』と、私は月並みの理屈を眞面目臭つて言つた。

『僕なんぞはまア中等社會——と言つても、中の下ぐらゐのところだが、それも表面だけの話さ。……中等紳士で候のと、こんな洋服を着込んだり、門のある家に住んだりしてるが、内所の苦しさは新網や鮫ヶ

てゐた。

『極樂なんて、ほんとにあるんだらうかね。』

考へ／＼た末に、大きな人はこんな詰まらないことを言つた。

『何んとも分りませんね。』と、私は嘲弄うつもりで言つた。

『極樂が若しあるとすると、今斯うやつて苦んでゐるのも、子供の時の煎餅一枚ぐらゐのものかも知れんかね。』と、大きな人は謎のやうなことを言ひ出した。

『子供の時の煎餅一枚ぐらゐ、ツて一體何のことですか。』

『僕は兄弟が多くてね。子供の時よくお袋から煎餅なんぞ貰つても、皆んなに行き渡らないもんだから、兄貴は二枚貰つてゐるのに僕は一枚きや貰はないこともあつたし、弟が一枚貰つて僕は一枚も貰はないこともあつたんだ。其の時の残念さつたらないです。……今から考へて見れや高が煎餅一枚だから、何うでもいいんだが、其の時は其の一枚の煎餅が命懸けの大問題だつたよ。……』

大きな人は柄にない比喩なんぞ引いて來て、重々しく語り出した。さうして、もう其の後は言はずとも分へてゐるのに、

『今斯うして生活に追はれて、子供を給仕に出さなけやならんやうになつて、藻掻き抜いてるが、將來極樂へ行つてから考へたら、子供の時煎餅一枚喰ひ損なつたぐらゐのことかも知れんね。……アハ、ハ、』と、取つて附けたやうな苦笑を添へて言つた。

『人間といふものは、何うかすると後生氣を出すもんですね。あなたが〇〇會社でドツサリ月給取つて

る時分は、地獄の極樂のといふことをテンで聞いたことがなかつたんでがね。』

『あんまりドツサリでもなかつたが、僕なんざア食つて行くことに困りさへしなけれや、餘計なことは考へんからね。……兎に角今の人數で無收入と來ちやア、神佛を思ひ出さうぢやないか。……』

『乃が宗教といふキヲ物の附け込みどころなんです。……地獄だの極樂だの、天國だの。何が何で、これが斯うと、比喩たとへすくめで誤魔化されちまうんだから。……何んでも比喩たとへちう奴が曲者ですよ。これは斯ういふやうなものと、勝手に一つ比喩を製造すると、其の比喩からまた比喩が生れて、ノツビキならんことになつて了しまうんですからね。』

『まあいゝさ。……僕は別に地獄極樂や天國を信じ様といふぢやない。君が言ひ出したからツイ言つて見たんです。しかし何うしたもんだらうね。宇一郎とこの雄二郎は眞逆間違へば小僧にでも何んでなるだらうが、季の五人の年子としこがね、まだこまかいんだからお力りきもあれを抱へて困るだらうと思ふんさ。……實はね、こんなやくざな意氣地なしの亭主なんか居ない方がいゝだらうと思つてね、奥州の棚倉か、北海道の後志邊へでも行つて、一思ひにやつて了しまうかとも思ふんだが。……』

大きな人は右の手に持つてゐた扇子で腹切る眞似をして、沈痛な色を顔の全面に浮べつゝ、人通りの稀れな廣い往來の松の木の下に棄石の上に下カと腰をおろした。客の少い電車が轟と行き過ぎた。

『銀行へ行くのが遅くなりやしませんか。』と、私は稍ほどどぎまぎして言つた。

『銀行なんぞ何うだつていゝや。……この松の樹はいゝね、レコやるのに。……』と、大きな人はまた両手で首を括くる眞似をして、眼尻に小皺を寄せつゝ笑つたが、其の眼は戲談らしくなく凄かつた。

「橋よりヒドいんだものね。」

『さうですとも、正體は貧民で勞働者で、しかも失業者なんです。が、紳士といふ皮を被つてゐるから、暑苦しくていけないんです。眞逆棟割長屋へも入れないとか、印絆纏も着られないとかいふことになつてね。』

『見得を飾らうとするから悪いんかなア。』と、大きな人は深く考へ込む風をした。先刻から幾度かポケットを探ぐつて取り出した皮の巻煙草入れの、蓋をとつて見ては空なのに失望しつゝ、元のポケットに納めたのを、また取り出して蓋をとつて、漸と氣付いた風で、周章で、納ひ込みながら、物欲しさうな顔をした。

『見得と限つた譯でもないでせうが、さういふ習慣で來たんですから、急に最下層の汚らしい生活も出來ませんものね。第一身體がさういふ風になつてゐないもの。……物の起るのにも夫れ相當の順序があるやうに、物の亡ぶるのにもまた順序があるんですよ、亡び行く中等社會も、全く痕跡を留めないでになるには長いことかゝるでせう。其の亡び行く道中筋に當つたものが、いゝ面の皮なんです。』

『全くだね、一文の收入はなくても、ヘナ／＼普請ながら、名前だけでも門や玄關の附いてる家へ住まなけやならんし、噂は奥さんで言はれるし、子供は學校へやらんならんし、詰らない力持ちをしてるんだ。』
『だからまア、後生を願つて、極樂行きを樂みにしますかね。……現在の苦しみは高が煎餅一枚の問題だと思つて。……』

口から出まかせに、私はさま／＼のことを言つてみた。

『何んしろ、この不景氣では仕様がな。全體何時になつたら景氣が直るんだらう。戦争が済めばとか、何が何すればとか、前觸れだけは、耳が抵になるほど聞いたが、一向直りさうもないね。』と、大きな人はまた未練がましい口調をして言つた。

『南の方へ急に流れてる川の水が、風の工合か何かで、一寸ばかり逆に流れたつて、川が北へ流れるとは言はれないんです。今の世で景氣が直る／＼といふのは、南へ流れてる水が少しばかり北へ波を打つぐらゐのことを指すのです。……世界の富が増加して、貧民がまた増加するといふ變な風向きが根本から改まらない限り、不景氣の直りツこはありません。』と、私は一廉の物識りらしい風をして喋舌つた。

『そんなものかなア。』

呑み込めな。と言つた顔をして大きな人は、溜息とともに立ち上り、

『雄二郎行かうか、遅くなる。』と、動物性の愛情に充ちた、險の弛んだ眼で息子の顔を見詰めてゐた。

『うむ。』と、濁つた聲で返辭して、雄二郎はまた欠伸をしながら、他人事のやうにノロ／＼と歩き出した。

一滴、二滴、太い松の粗らかな枝の間から雨が落ちて來た。

『家根の上の蝶々の死骸は何うなつたらう。』と、私はまた彼の美しく憐はれな小ひさいものゝことを考へ出した。

『蝶々の死骸。 美女の死骸。……雨に流されるだらう。……』

大きな人に別れてから、私はこんなことを口の中で言つて、家の方角へ引き返へした。

振り返へつて見ると、大きな人は息子を先きにして、えんやらんと電車に乗るところであつた。(完)